

2022年1月1日  
元旦礼拝

聖書

ローマ人への手紙5章1～5節

5:1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

5:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。

5:3 そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、

5:4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

## 説教

この希望は失望に終わる事はありません。

5章1～5節には大切なことばが沢山出て来ます。

信仰による義



神との平和



神の栄光を望んで喜ぶ



艱難も喜ぶ

艱難



練られた品性



希望



この希望は失望に終わることがない



信仰に生きる事は  
思いと働きにおいて積極的に生きる力  
スポンク先生の証し  
1980年～ スポンク先生の10年  
1990年～ ガウブ先生の25年

神の栄光のために積極的に生きる

日本の宣教

1549年ザビエル

1858年ヘボン

多くの労苦、犠牲

人の評価ではない  
自分の利益、栄誉のためではない  
神様のため、神様に喜ばれるため



## 山羊のおじさんニコルソン先生

昭和28年1953に学校図書で発刊された小学校五年生の『国語・上』教科書には、次の文が載せられた。

ニコルソンさんは、日本で教会の牧師をしていました。動物がたいへん好きで、やぎをかっていました。近所に病人があつたり、ちちのたりないあかちゃんがあつたりすると、ニコルソンさんはさっそくやぎのちちをしぼって「どうぞ、これを飲ませてください」と言って、持って行ってあげるのです。ですから近所の人たちはみんな、ニコルソンさんのことを「やぎのおじさん」とよんでいました。

ところが、昭和16年に、太平洋戦争がおこりました。ニコルソンさんは、すきな日本にすることができなくなってしまいました。しかたなしに、30年も住みなれた日本の土地と、たくさんの日本人の友だちに別れをつけてアメリカへ帰って行きました。日本をひきあげたニコルソンさんは、カリフォルニア州のコロラド川のほとりで果樹園を経営して、メロンや夏みかんを作ることになりました。また、日本での生活を思いだして、ここでもやぎをかいました。

長かった戦争もやっと終わりました。久しい間、世界の人々が心から望んでいた平和が、ふたたびおとずれてきました。けれども、勝った国も、負けた国も、物資がたりなくなっていました。とりわけ、負けた国は損害も大きく、国民の苦しみようはたいへんなものでした。そこで、そういう国の人々を、1日も早く助けようという運動がおこり、アメリカにその本部ができました。少しでもゆとりのある人から衣類や食料を出してもらって、きのどくな外国の人々に送ってあげ、戦争ですさんだ心をなくさめてあげようというのです。ニコルソンさんもその委員に選ばれました。

日本へは、学校給食の材料を送ろうとか、いろいろの相談が始まりました。ニコルソンさんは「そうだ。日本にいる時、わたしはやぎのおじさんといわれたのだ。ひとつ、日本のこどもたちにやぎを送ってあげよう。おいしいちちをのんで、こどもたちはじょうぶに育つだろう」と考えました。

ニコルソンさんは、やぎを買うお金を集めるために、方々をまわって歩きました。お金を集めるだけのことならば、お金持ちから寄付してもらう方がたやすいことだったかもしれませんが、けれども、日本の少年少女へやぎを送ってあげるのには、同じぐらいのこどもから集めたお金で買いもとめた方が、どれほどとうとくもあり、またおたがいのまごころが通ずることだろうか。そう思ったニコルソンさんは、アメリカ各地をまわって「日本のこどもへやぎを送りましょう。こどもたちのこずかいの中から、ほんの少しでも出しあって、やぎを送ってあげましょう」と説いて歩きました。

その日も、ニコルソンさんは、コロラド川をずっと山おくへさかのぼって、あちこちの学校をたずねました。「日本のこどもたちへやぎを送ってあげましょう」

ニコルソンさんは、ねっしんに説いてまわりました。そして、また、つぎの村へと急ぎました。ところが、いつのまにか、空はどんよりくもり、夕日もしずんでしまいました。めざすイーストン村まではまだ遠いのです。「どこか、この辺でひとばんとめてくれる所はないかしら」こう思って、1けんのみすぼらしい農家をたずねました。

その家には、おかあさんと3人のこどもがいました。上の子はハリーといって12才ですが、足が悪いとのこと。つぎがジョンで9才、いちばん下のかわいい女の子はメリーといって、5才でした。おとうさんはこんどの戦争で戦死してしまい、今ではおかあさんの手一つで、小さな果樹園を経営して、まずしいくらしをしているのでした。それを聞いて、ニコルソンさんはすっかり同情してしまいました。カバンの中から、いろいろなおかしを出して、こどもたちに分けてあげました。すると、いちばん上のハリーが「おじさんはイーストンへ行くの」とたずねました。ニコルソンさんは「うん、ちょっと、あそこの学校に用事があるね」

「では、おじさんは先生ですか。」「いや、学校の先生じゃない。わたしは長い間日本に住んでいたのだが、じつはこんど、、、」と、日本の友だちへやぎを送ること、やぎを買うお金を、アメリカのこどもたちから集めていること、そのために、イーストンの学校へ寄付のお願いにいくとちゅうであることなどを話しました。



3人のこどもたちは、じっとニコルソンさんの顔を見上げて聞いていましたが、やがて、ハリーは洋服の内ポケットから何かくちゃくちゃになった小さな紙包みを取りだしました。その中には、1ドルの銀貨がはいっていたのです。「おじさん、これはたんじょう日のお祝いに、おかあさんからいただいたのです。本でも買おうと思って、たいせつにしまっておいたのですけれど、どうか、やぎを買うお金に使ってください。そして、日本の友だちに、1頭でも多く、やぎを送ってあげて下さい。」それに続いて、ジョンもメリーも、だいじにしていた1ドルの銀貨をもちだしました。なみだが、ニコルソンさんのほおを伝わって流れました。「いいんだよ。おじさんには、もう、たくさんのお金が集まっているんだから、そのお金は、さ、しまっておきなさい」

けれども、ハリーたちは「このお金もぜひ使ってください」と言って、どうしてもききいれません。ニコルソンさんはこまってしまって「それでは、この3ドルはありがたくいただくことにしよう」と、いったんそれを受け取りました。そうして、自分のさいふから2ドルのお金を出して、それに加えました。「さあ、これで5ドルになるね。5ドルあれば、子やぎが1頭買える。だから、お母さんに買っていただいて、大きく育ててごらん。そうしたら、おじさんは、ほかのやぎといっしょにして、日本へ送ってあげるから」

ニコルソンさんはこう言って、ハリーたちに5ドルのお金をわたしました。その夜は、ハリーたちの家にとめてもらい、あくる朝早く、こどもたちとなごりをおしみながら、ニコルソンさんはイーストン村へたっ  
ていきました。おかあさんは、そのすぐあと、町へ出て、めすの子やぎを1頭買ってきました。3人のこ  
どもは、なかよしの家族がひとりふえたので、たいへんな喜びようです。ジョンとメリーは、毎日、草  
をかってきて、食べさせました。

夏が去り、秋も過ぎて、やがて新しい春を迎えました。ある日のこと、ニコルソンさんのところへ1通  
の手紙が届きました。

[おじさんがわたしの家へとまられてから、もう1年以上にもなります。おじさんに買っていただいた1  
頭の子やぎも、いまではりっぱなおかあさんやぎになって、こどもを4頭もうみました。やぎのせわは、  
ぼくとジョンとメリーでしています。ぼくは毎日、やぎのちちを飲んでいきます。おかげで、悪かった足が  
とてもしょうぶになって、このごろはひとりで歩けるようになりました。それから新聞で見ましたが、  
方々の学校から集めたお金で買ったやぎが、もう2回も日本へ送られたということです。この次  
送る時には、ぜひ、ぼくたちのやぎも連れていってください。そして、日本のお友だちに、やぎのちち  
を少しでも多く飲ませてあげてください。お願いします。

ニコルソンさんはいく度もいく度もこの手紙を読んでいるうちに、むねいっぱいこみあげてくる喜びを感じました。

ニコルソンさんはハリーたちに会いたくなりました。さっそく自動車をとばして、遠いハリーの家をたずねていきました。ニコルソンさんをむかえたハリーたちの喜びはどんなだったでしょう。自分たちがいっしょうけんめいに育てた親子のやぎを、ニコルソンさんの前にひっぱってきて見せました。ニコルソンさんは、ハリーたちに「こんど送る時には、きつきみたちのやぎも送ってあげよう」とやくそくして、ハリーたちをいっそう喜ばせました。

昭和24年の1月16日、250頭のやぎが、はるばる海をこえて横浜に着きました。にぎやかなやぎの伝達式が行われました。その時、同じ船に乗ってやぎを送ってきたニコルソンさんは、ハリーの手紙を声たかだかと読みあげました。

日本のお友だちのみなさん、どうかぼくに代わって、このやぎをりっぱに育ててください。アメリカのぼくたちと、日本のみなさんと、このやぎをとおして、ほんとうのなかよしになりましょう。これらのやぎは、日本中のこ児院へ分けられました。今ごろは、両親を失ったこどもたちにおいしいちちをあげたり、いい遊び相手となってかわいがられているでしょう。

ニコルソン先生は昭和25年ころ  
五個荘におられました。

先生の紹介で私たちの団体が滋賀県で働くこ  
とになりました。

戦後引き上げて中学校の英語の教師になった  
私の父はこの先生から大変大きな感化を受け  
ました。

多くの労苦があります。労苦の先には神様の喜んでくださる栄光があります。  
この希望は失望に終わることがない。  
このことを確信して、信仰の導かれる業に励む  
一年を歩みましょう。

祈り